

養和の飢饉

また養和のころとか、久しくなりておぼえず。二年が間、世の中飢渴して、あさましきこと侍りき。あるいは春・夏、日照り、あるいは秋、大風・洪水など、よからぬことどもうち続きて、五穀ことごとく生らず。夏植うる宮みありて、秋刈り、冬収むるそめきはなし。これによりて国々の民、あるいは地を捨てて境を出で、あるいは家を忘れて山に住む。さまさまの御祈り始まりて、なべてならぬ法ども行はるれど、さらさらそのしるしなし。京のならひ、何わざにつけても、みな、もとは田舎をこそ頼めるに、絶えて上るものなければ、さのみやは操も作りあへん。念じわびつつ、さまさまの財物かたはしより捨つるがごとくすれども、さらに目見立つる人なし。たまたま換ふる者は、金を軽くし、粟を重くす。乞食、道のほとりに多く、憂へ悲しむ声耳に満てり。

前の年かくのごとくからうじて暮れぬ。明くる年は、立ち直るべきかと思ふほどに、あまりさへ疫癘うち添ひて、まささまに跡形なし。世の人みなけいしぬれば、日を経つつ窮まりゆくさま、少水の魚のたとへにかなへり。はてには笠うち着、足ひき包み、よろしき姿したる者、ひたすらに家ごとに乞ひ歩く。かくわびしれたる者どもの、歩くかと思れば、すなはち倒れ臥しぬ。築地のつら、道のほとりに飢ゑ死ぬる者のたぐひ、数も知らず。取り捨つるわざも知らねば、臭き香、世界に満ち満ちて、変はりゆくかたちありさま、目も当てられぬこと多かり。いはんや河原などには、馬・車の行きかふ道だになし。

あやしき賤、山がつも力尽きて、薪さへ乏しくなりゆけば、頼むかたなき人は、自らが家をこぼちて、市に出でて売る。一人が持ち出でたる価、一日が命にだに及ばずとぞ。あやしきことは、薪の中に、赤き丹つき、箔など所々に見ゆる木、あひまじはりけるを尋ねれば、すべき方なき者、古寺に至りて仏を盗み、堂の物を破り取りて、割り砕けるなりけり。濁悪世にしも生まれあひて、かかる心憂きわざをなん見侍りし。

いとあはれなることも侍りき。去りがたき妻・夫持ちたる者は、その思ひまさりて深き者、必ず先立ちて死ぬ。そのゆゑは、わが身は次にして人をいたはしく思ふ間に、まれまれ得たる食ひ物をも彼に譲るによりてなり。されば、親子ある者は定まれることにて、親ぞ先立ちける。また、母の命尽きたるを知らずして、いとけなき子の、なほ乳を吸ひつつ、臥せるなどもありけり。

仁和寺に、隆暁法印といふ人、かくしつつ数も知らず死ぬることを悲しみて、その首の見ゆ

るごとに、額に阿字を書きて、縁を結ばしむるわざをなんせられける。人数を知らんとて、四、五両月を数へたりければ、京のうち、一条よりは南、九条より北、京極よりは西、朱雀よりは東の、道のほとりなる頭、すべて四万二千三百余りなんありける。いはんやその前後に死ぬる者多く、また、河原、白河、西の京、もろもろの辺地などを加へていはば、際限もあるべからず。いかにいはんや七道諸国をや。

【口語訳】

また養和の頃であつたらうか、長い年月が経つて（正確には）覚えていない。二年間、世の中に食料が欠乏して、ひどい状態になったことがあります。一方では春・夏に、日照り、一方では秋に、大風・洪水など、よくないことが次々に続いて、穀物は全て実らない。夏に（苗を）植える作業をして、秋に刈り取り、冬に（倉に）収めるにぎわいはない。このために諸国の農民たちは、ある者は耕作地を捨てて住んでいる土地を出て行き、ある者は自分の家を捨てて山に住む。（朝廷の命令によって）さまざまな御祈禱が始まつて、特別な密教の修法などが行われるが、まったくその効き目がない。都の常として、何事につけても、みな、生活の資源は地方を頼りとしているのに、まったく（都に）上つてくる物がないので、そうそう体裁を取り繕つてもいられようか（いや、とてもいられるものではない）。堪え切れなくなつては、さまざまな財宝を片端から捨てるようにする（売る）けれども、（それらの財物に）まったく目をとめる人はいない。まれに物々交換する者は、財宝を軽んじ、穀物を重んじる。乞食が、道端に多く、嘆き悲しむ声が耳にいっぱいになった。

（飢饉の）前年（一年目）はこのようによく終わった。翌年は、立ち直るだろうかと思ううちに、その上疫病までが加わつて、いつそうひどくなり、よくなる兆しがない。世の人がみな飢えてしまったので、日が経つにつれ極限の状態に追い込まれていく様子は、少水の魚のとえのとおりである。ついには笠をかぶり、足を（脚絆などで）覆つて、悪くはない身なりをしている者が、ひたすら家ごとに物乞いをして歩く。このように困窮し、心のはたらきがにぶり、ぼうつとなつた人々が、歩くかと思つて見ていると、すぐに倒れ臥してしまふ。土塀のそば、道端に飢え死にする者の類は、数もわからない（くらい多い）。（死体を）片付ける方法もわからないので、臭い匂いが、辺り一帯に満ち満ちて、変わつてゆく顔や姿は、目も当てられないことが多い。ましてや（鴨川の）河原などには、（死体がたくさんあつて）馬・車が行き交う道さえない。

身分の低い者や、木こりも力尽きて、薪までもが乏しくなつてゆくと、頼る所のない人は、自分の家を壊して、市に出て（薪として）売る。一人が（市に薪を）持つて（行き、その代償として）得られたものの価値は、一日の命（をつなぐ食料分）にさえ足りないということだ。奇怪なことには、薪の中には、赤い丹（塗料）が付き、箔などが所々に見える木が、交じつていたのを調べてみると、（生活に困つて）生きるためにできる手立てのない者が、古寺に行つて仏像を盗み、お堂の道具を壊し取つて、割り砕いたものであつたよ。仏法の廢れた末法の世に生まれ合わせて、このようなつらいありさまを見ました。

たいそう哀しく心打たれることもありました。離れがたい妻・夫を持つている者は、その愛情が（相手より）まさつて強い者が、必ず先立つて死ぬ。そのわけは、わが身を後回しにしても相手を大切にいたわりたいと思うので、ごくまれに手に入れた食べ物でさえも相手に譲ることによつて（そうなつてしまふの）である。だから、親や子のある者の場合は（親がわが身を二の次にして子どもをいたわることが）決まつていふことなので、親が先立つのであるよ。また、母の命が尽きたのを知らずに、幼い子どもが、なおも乳を吸いながら、横になつてゐる姿などもあつたのだった。

仁和寺に（いた）、隆暁法印という人は、（人々が）このようにして数知れず死んでいくことを悲しんで、死者の頭が見えるたびに、額に阿字を書いて、成仏できるように仏縁を結ばせることをなさつたという。（死んだ人の）人数を知ろうとして、四、五月の二か月にわたつて（死者の数を）数えたところ、京の町の中で、一条大路よりは南、九条大路よりは北、京極大路よりは西、朱雀大路よりは東（区域で）の、道端にある（死体の）頭は、全部で四万二千三百余りあつたという。ましてやその（二か月の）前後に死んだ者も多く、また、河原、白河、西の京、多くの辺鄙な土地などを加えていふならば、際限もないだろう。ましてや、日本全体ではいふまでもない。